

「あなたの個性は何ですか」

福井市 灯明寺中学校 3年 青木 芙蓉

「あなたの個性は何ですか」

そう問いかけてみよう。あなたは何と答えますか。

私の祖母は、ある施設を運営している。その施設では、障がいのある方々が地域の人々と協力し合い、パンや工芸品などをつくっている。祖母は私に対して、

「『いい経験』になるから。」

と言って、私を施設に連れていってくれた。そして、一日そこで障がいのある方々と交じって働いた。しかし、働く途中で、急に声をあげる人、集中力が切れて休み出す人など様々な人がいた。祖母はそのたび大変そうだったが、一人一人に笑顔で対応していて、私は感心した。

そして、私たちは昼休憩の時間になった。私は、祖母にききたいことがあった。

「障がいのある人を雇うって大変なのに、なぜ、わざわざこの施設をつくったの。」

と。すると、祖母は昔の話をしてくれた。

「おばあちゃんのお父さんはね、生まれつき弱視っていう一種の障がいを持っていたんだよ。お父さんはね、障がい

があるってだけで何も出来ないと思われて仕事が見つからなかったんだ。あと、おばあちゃんの友達の子どもが知的障がいを持っていたんだ。昔はね、子どもに障がいがあるのは、親の育て方が悪いからだと思われていたんだよ。でもその子には、詩をつくるのが上手だという才能があり、『個性』があったの。でも将来一人でも生きていけるように仕事もしないといけない。だから、おばあちゃんの仕事と『個性』を両立できる施設をつくって、そのような人を救えないかと考えたんだよ。もちろん障がいのある人を雇うのは大変。でも、今まで社会から差別されてきた人の思いを考えると、辛くて大変だよ。しかも、一人一人に『個性』があるって考えたなら、それを良さとして捉えられないかなと思ったんだ。」

私は、この話をきいてハッとしました。今までは『個性』とは特殊なところ、つまり人と違うことと少し悪い印象をもつてしまっていた。しかし、『個性』とはその人の才能であり特別なところ、つまり尊重されるべきところだと気づかされた。

祖母の話をきいて休憩していた時、施設で働く知的障がいをもっている男性の方が私に話しかけてきた。その方は、「見てください。」

と言ってその方がかいた絵を見せてくれた。色彩豊かで私はその方の絵のとりこになった。

「お上手ですね。絵がお好きなのですか。」

と私がきくと、

「とつても好き。絵をかいているときは何もかも忘れられるんだよ。」

と得意げに話してくれた。そして、

「あなたの個性は何ですか。」

と私はきいた。

「やっぱり…絵だよ。それで、僕の個性を認めてくれるのがこの施設。障がいがあるってことも『個性』として認めてくれるんだよ。」

私はこの時、祖母の言っていた『いい経験』の意味が分かったような気がした。この施設で一日働いたことで障がいがあることもその人だけの一つの『個性』だと捉え、尊重されるべきだと改めて気づかされたのだ。そして、話をきいた男性の口から、障がいという『個性』を今まで認めてもらえなかったということ想像させるような言葉が発せられたことが、私の中で、悔しかった。

私は、決意した。これから自分の『個性』を自分から言える社会をつくっていかうと。『個性』が尊重され、『個性』の色であふれる色とりどりの社会。私も、障がいをもっている人ときくと、関わるのが難しそうだなと距離を置いてしまっていたかもしれない。今思うと、本当に情けない。

私は、知的障がいをもってしている男性が、自分の絵のことを話していたときのはちきれそうな笑顔が忘れられない。本当に生き生きと生きていて、輝いていた。そう、普通の人と何ら変わらないのだ。

私たちは、『障がい』という見えない壁で区別していかないだろうか。見えない壁を自ら作り出すよりも、その人のまだ見えぬ『個性』を理解し、知っていくことが、私の目指すこれからの社会につながる第一歩になると、私は確信している。必ず『個性』というものは全員に存在している。だからこそ、認め合えるのだ。

さあ、この質問に自信をもって答えられる社会を目指して。

「あなたの個性は何ですか」